永井龍男

雑文集

縁さきの風

講談社

縁さきの風

昭和五十八年五月二十日　第一刷発行

著者——永井龍男

© Tatsuo Nagai 1983, printed in Japan

発行者——三木　章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—二　郵便番号一二三　電話東京(三)九四五—一二一一　振替東京八—三九三〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社　製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——一六〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-200557-3(0)（文1）

目

次

四季雑記

友達の顔 11
去年今年 15
菜の花まで 22
ものの数 26
真昼の桜 30
鯉のぼり 32
朝顔の鉢 34

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

親しさを籠めて　38
夏帽子　41
小流れに近く　45
湖水の色　49
三日四日のこと　53
賜茶の席　57
日めくり　61
越前大野から永平寺へ　64

応答一束

芥川賞・直木賞展に寄せて　79
若い文学の記録　80
菊池寛の十分理髪　81
しろき・くろき　85
ないしょ話　89
ひげと髪　92
古い着物　98
ムーラン・ルージュの画家　102
再び、切るたのしさ　105

鎌倉つれづれ
短　日　111
おみくじ　115
白梅紅梅　119
江ノ電今昔　123
留守番　128
横丁の隠居　133
梅雨の花々　138
秋の夜長　143
狂った夏　148
花　野　152
すすきの穂　157

追憶の人

くるるの音　小林秀雄を偲ぶ　163
「苺酒」から　尾崎一雄について　182
横光利一展に寄せて　186

全集の校正を終って

刊行に寄せて　191
校正を終って　192
あとがき　288

装幀　原　弘

雑文集　縁さきの風

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

四季雑記

友達の顔

毎年元旦には、屠蘇の杯をまわして息災を祝う真似ごとをする。年末から手伝いに来ている姪を加えて、ここ数年来老夫婦三人のことだから、まことに内輪の仕来たりで吹聴するまでもないが、私は正月が好きだから、元旦は大切に過す。

お神酒も猪口で二三杯、雑煮を祝ってから炬燵に移って、茶をいれてもらう。到来の菓子が添えてあると、箱ごと手もとにとって、いわれ書きを読む。浮世離れした文句が多く、ほろ酔いには格好な読み初めであろう。元日の新聞は折り目の正しいまま、二日に読んでも三日に読んでも通用するから、そのままにして歳時記を取り寄せる。

一句新年の詠み初めをという下ごころもないではないが、気忙しい世の中を一日だけのんびりしたいというのが、本音である。それに、昨年の春には秋には、どう暮したかということが、季節の移り変りとともに記憶に浮んできたりして、しばらく我を忘れる。また例えば、「成

木責」などという古事が、新年の部に記載されている。一月十五日を昔は小正月と呼んだそうで、その日農家では果実の成る木に、刃物で傷をつけ、「成るか、成らぬか」と問いかけ、「成ります、成ります」と自答するまじないが行われた由、柿の木などが一番多かったという。そういうたぐいの古めかしい行事が、新年の部にはたくさん集録されている。

昨秋といっても、十月からつい十二月の初めにかけて、鎌倉中どこもかしこも近年にない紅葉の美しさだった。櫨、桜、もみじと数えて、前山も庭も色とりどりであった。

おそらく、塩分を運んでくる台風が来なかったこと、急に寒さの増したことなどが、紅葉の色を冴えさしたものであろうが、梅もどきや南天、美男かずらなどの小さな実の類が数多く成り、柿も当り年のようであった。

紅葉は朝昼夕方と、日ざしによってそれぞれに趣きがあり、小さな実は朝日をうけて紅が生き、柿は夕焼け空にひときわ映えた。——もう少し、昨秋から冬にかけての身辺雑記を続けよう。

長い竹竿を選んで、柿を落しに出たが、私の腕の力と背丈では限りがある。梯子を使おうとすると、縁に立った妻がうるさく小言を云う。年を考えて事をせよ、七十七の者が梯子から転落しても自慢にはならぬと、いつの間にか柿の木の下まで来て云い立てる。

柿の実は、どの高い枝にも鈴成りだが、梯子に乗らない限りわがものではない。痩せた老人と、小さな老婆が、仕様ことなしに柿の木を見上げ、鵐がどこかで鳴いている。数日してそん

なことを気軽に頼める知人が来たので、取れるだけ取ってもらって、どうだ鴉め尾長めと胸のしこりを下した。

昨秋の紅葉は、落葉樹のすべてが美しかったが、わけてあざやかだったのは櫨で、前山に、小庭に、朝夕見飽きることがなかった。この木は紅葉と同時に、葡萄に似た房形に、小粒の実をつける。この実から、蠟を作るというが、歳時記によれば、樹皮は染料にもなるという話である。実生で繁殖力が強く、思わぬところに芽生えた若木が、晩秋の冷気とともに紅を増して人を驚かせる。

冬至には、どの落葉樹も葉を落し、枝垂れ桜の枝々が銀色にかがやく。

日はまったく短く、夕焼けが空を染めると見るうち、大日輪は刻々と西に没する。南縁の硝子戸越しに、幾房かの櫨の実が黒く細かく、宵の明星がその辺りにひときわ清く煌めく。戸外の寒さは、一日一日と厳しいことであろう。

元日の炬燵に孤座して、私は覚えたばかりの「成るか、成らぬか」を、自演してみる。そしてすぐ、「成ります、成ります」と自答して、明日は早速初仕事だと呟いてもみる。

台所の片付けを済ませた老妻と姪が、炬燵に加わる。

成木責めの話をしようとして、私はやめた。

「面白いね、歳時記の冬の部に、狸や狐が入っている。冬眠同様にじっとおとなしくしている奴らを、冬の部に入れているんだ」

私は、まるで別のことを云った。

妻にとっては藪から棒のことなので、姪と顔を見合わせ、

「狐は、襟巻きにされるからでしょうか」

と、頓珍漢な返事をした。

「狸が入っているばかりか、寝酒も冬の季になっていた。狸が貧乏徳利を下げた置物を、そっくりそのまま思い出した」

実は私は、巣へ帰った狸が寝酒をしている姿を、ある知人の後ろ姿と重ねて楽しんでいた。ちょっと猫背のところも似ているわいとほくそ笑んでいたのだが、元日早々かりにも人をおもちゃにしてはならぬと自戒して、思いつきを口にはしなかった。

元日の閑居は、なんとない淋しさを伴うためか、日頃親しくしている友達の顔を、あれこれ思い出すことである。

（朝日新聞・昭和五十七年一月一日）

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c